



中国新疆ウイグル族現代化における生活変化の実態 調査研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石, 其琳, SEKI, Kilin メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/439

中国新疆ウイグル族現代化における生活変化の実態調査研究

石 其 琳

Survey of Changes Caused by Modernization in Life Style and Awareness of Weiwuer Tribe People in Xin Jiang, China

Kilin SEKI

はじめに

少数民族の現代化における生活変化の実態調査研究については、これまでの数年間、多地域を調査して、少数民族の生活実態を研究してきたのであるが、今回もこの研究の一環として、中国新疆地域において、特にウイグル族を中心に、約4500 kmを踏破した現代化生活の実態調査を行ったのである。

少数民族の生活の現代化への転化は、その歴史発展においては必ず経過する過程であろう。異なる歴史伝統をもつ民族は、それぞれが歴史の時期背景がもたらされた要素により、その伝統から現代化過程の内容、速度、方式も異なるのである。今回調査の中心であるウイグル族の場合、その特殊な歴史、経済、政治、宗教などの人文的要素と自然的地理の要素に影響され、他の民族と異なる独特な生活様式と精神風貌が育まれているのである。中国の多数の少数民族地域において、自己色が強い故に現代化の過程では、当然独自な現象とそれに伴う問題も多方面においてみられる。本論はその生活における現代化の実態をもとに、その特殊性を見出しながら、問題点を考察したいと考える。

第一章 新疆ウイグル族の概況について

この章において、新疆地域の現代化の実態を理解するため、まず新疆地域が持つ特殊な歴史人文的背景と自然条件の地理的環境について、説明しておきたい。

一. 歴史的人文背景について

新疆地域の歴史的発展背景を理解するには、ウイグル族形成の過程と中国封建王朝との政治

文化の関わりにおいて、二方面から見る必要がある。なぜなら、新疆は古くから多民族混住地域であり、その歴史形成過程は、漢民族または他の民族と共に歩んだ道のりであったからだ。

現在新疆ウイグル自治区は160万km²、中国総面積の6分の1にあたる面積である。中国最大の（省）自治区であり、古より「西域」と呼ばれ、多民族混住地区である。1990年中国人口調査の資料によると、全国ウイグル族の99.73%が新疆地区に居住している。同自治区では昔からウイグル族のほかに、カザフ族、回族、モンゴル族、キルギス族、タジク族、シボ族、ウズベク族、満族、タフール族、タタール族、オロス族、漢族などが共存している。

（1）ウイグル族の形成について

ウイグル族の生活伝統文化を理解するには、まずこの民族の形成過程を知る必要がある。ここでは最も重要な部分を略述したい。

「ウイグル（維吾尔）」は民族の呼称ではあるが、もともとは「団結」、「聯合」の意味をもった言葉である。同時にこの民族の形成の歴史に関係していると考えられる。中国の古文献には新疆地区に住む遊牧民に、「袁紇」（北魏）、「韋紇」（隋）、「回紇」、「回鶻」（唐、宋）、「畏兀兒」（元、明）など、時代によって異なる呼称で記載されている。この名称変遷の事実により、ウイグル族が形成に至る複雑さと中国歴史発展との深い関係を示唆しているであろう。

ウイグル族の源は、紀元前3世紀に、中国北部及び西北地域に生存する「丁零」（丁靈、丁令とも呼ぶ）という遊牧民が先祖とされているが、またもとから中国北方に住む強族「匈奴」との血縁関係があるとの説もある。後に部族の名称が「丁零」、「鉄勒」、「鐵歷」、「赤勒」、「敕勒」、「高車」などにもよばれていた。5世紀に、高車族の中の「袁紇」部族が指導的地位に立ったが、7世紀に異民族の侵攻に抵抗するため、団結して回紇部落連盟を成立したのである。744年（唐天宝3年）唐王朝に冊封され、唐王朝の政治大反乱事件「安史の乱」の鎮定に手助けをしたほど友好関係を維持していたのである。788年自ら「回紇」族が軽快に飛び回るジュズカケバト（鳥）のように、「回鶻」と唐王朝に改名を申しでたのである。9世紀半頃、回鶻族は外乱により、諸部族が離散し、その大部分の族民は西域へ遷移し、定住し始めたのである。さらに西域に移住してきた漢民族、新疆南部の原住民族及び後に移住してきた民族（吐蕃、契丹、蒙古など）と長期に共存し、次第に「ウイグル族」として形成するに至ったのである。12世紀初期、契丹族によって、回鶻国は撃敗されたが、モンゴル勢力の高揚により、14世紀から16世紀の間、ウイグル族居住地域は、200年以上の分裂期間を経て、喀什噶尔汗国（後の葉爾羌汗国）を建立するが、基本的にモンゴル王朝の政治支配下にあった。しかしこの頃、新疆地区の生活方式が遊牧から定住へと転化したことにより、支配者側のモンゴルもあらゆる面において自然的に同化され、基礎的ウイグル民族の再構成を成し遂げた重要な時期であるといわれている。集団として、多くの民族が同じ地域に居住し、共同意識を固定化され、内面化していくことが、ウイグル族として仕上げられていく流れであろう。その後、幾度となく政治支配の紛乱が起こるにもかかわらず、この基盤はそれほど崩れなかつたのである。だが、ウイグル族の民族基盤を固めたもう一つの重要な視せねばならない原動力は、宗教信仰の影響だと考えられよう。

（2）宗教信仰の影響について

現在、新疆地区において、最も多く信仰されているのはイスラム教である。しかしウイグル族の宗教信仰の流変は、政治と生活形態の背景に、大変重要な働きかけがあったのは事実である。

イスラム教が7世紀に創立された後、新疆地区への傳入時期について定説がなく、一般に9世紀末から10世紀初頭、陸のルートを経て傳入したと言われている。それまでの7世紀草原遊牧の回紇時代では、自然を崇拜する薩滿教を信仰していた。その後、シルクロードの開通によって、西から摩尼教（6世紀以後）、仏教を受け容れたが、しかし遊牧生活方式との不調和のため、それほど広がらなかった。同時に祆教（4世紀頃より）、景教（6世紀より）などの宗教もこの地域に流入されたのである。9世紀後期、生活方式の変化と高昌回鶻王室が仏教へ改信することにより、13世紀イスラム教の盛行をみるまで、仏教はこの地区において、支配的地位を固めたのである。およそ13世紀から14世紀後半100年余りの間、新疆地区においては、イスラム教を含めて、各宗教は共存しながら、それぞれの根拠地で各自発展するという状況下であった。だが、14世紀の半ばに、イスラム教が大きく発展するチャンスに恵まれたのである。当時のモンゴル族支配者自身がイスラム教へ改信したが、その政治力をもとに、戦争という手段を通して、仏教を禁じ、イスラム教の地位を強制的に確立させたのである。これらモンゴルの支配者は、上述で触れたウイグル族に同化された集団である。

当然イスラム教が新たに新疆地区の最も強力な統治的存在を維持できたのは、政治的理由以外に、客観的因素もあったと考えられる。それは当時新疆の自然地理状況と経済制度の需要性がイスラム教の発祥地アラブ社会と共通性が多い点に理由があったと言えよう。更に伝教の過程において、他の宗教の寺院または文物が徹底的に除去されたことによって、イスラム教が新疆地区に統治的地位を定められ、ついにこの地域には多宗教が共存する環境はなくなり、さらに根強く現在まで定着にするに至ったのである。

（3）漢民族文化社会との関係について

考古資料によれば、新疆地区は、地理的にも隣接しているため、古代から中国の東北、内モンゴル、青海、寧夏、甘肅地域の狩猟、畜牧を中心とした細石器文化と共通性があり、多くの文献資料にもその痕跡が残されている。漢文古籍の《尚書》、《山海經》、《呂氏春秋》にも西域に関する記載が見られ、地理古文献《尚書・禹貢篇》に「昆山の玉」という記載があることから、戦国時代から、既に新疆名産の玉が中国内地へと運ばれているのである。紀元前138年、119年、漢代の使者張騫が2回にわたって西域へ、神爵2年（紀元前60年）西域都護府が設置され、天山南北、巴爾克什湖西部と南部地区及びパミール地区の36国を管轄することになった。紀元前327年、前涼王朝が吐魯番地区に高昌郡を設置する。これは中国が西域において、郡県を始めて設置したことである。7世紀に、唐王朝により西域に安西都護府が設置され、8世紀初期に北庭都護府が増設されている。13世紀の元朝時代では、行省を設置し、明代に入ると、哈密衛を設置しながら、西域の割拠政権と従属関係を保っている。1884年清朝政府は行省

を設置し、「故土帰新」の意味として、名称を「新疆」と改名したのである。その後、民国時代から中華人民共和国に入り、幾度の波乱を経たが、漢民族社会との関係は断たれなかったのである。1953年民主改革として、民族区域自治会政策を遂行し始め、1955年10月1日正式に新疆ウイグル自治区が成立されたのである。当然ウイグルを名称に入れたのは言うまでもなく、ウイグル族の人口が大きく占めている現実を考慮したことであろう。漢民族とのかかわりの深厚性は、長い歴史事実によって明らかであろう。

以上述べてきたように、ウイグル族の民族形成の流れと宗教信仰の演変過程、更に漢民族とのかかわりを説明に加えたのは、現在新疆地区に居住するウイグル族の文化伝統、生活習慣の変化を考察する場合、これら長年の洗練からもたらされた複雑な要素を同化、吸収しながら、新たにウイグル族の伝統文化として、確立され、定着した背景を重要視せねばならないと考えられる。

二. 自然的地理環境について

ウイグル族の伝統文化を考察するには、歴史的要素のほかに、その生活環境の自然風土も重要な鍵だといわねばなるまい。特に新疆地区は、中国西部最大の砂漠地域であるがため、それが住民の生活行動に多大な影響をもたらすことは当然であろう。

新疆自治区は中国最大の面積を持つ行政区である。北にアルタイ山、西にパミール高原に連接し、南にアルキン山、崑崙山に囲まれ、中央に天山山脈が横断する形である。全体が天山によって南北に二つ盆地が存在する。南のタリム盆地には、中国最大のタクラマカン砂漠があり、乾燥で温暖気候である。北のジュンガル盆地にはイリ河平原が広がり、中には数本の川が流れるため、農牧に適するオアシスがあるが、気候は寒く雪と雨が多いのである。天山の東側には中国では最高に熱い海平線下のトルハン盆地があり、砂漠のオアシスには農作物のほか経済作物の綿花も多く生産されている。このように相違する景観を持つ地理環境で生活を営むには、当然その影響と制限が独特な生活意識と方式を育むであろう。以下は上述の人文的、自然的背景を踏まえたうえで、ウイグル族の生活実態の変化と問題点を考察してみたい。

第二章 伝統的生活意識の転化の実態と問題点について

この章から、ウイグル族の生活実態の変化を調査した写真資料を取り上げながら、重点的に問題点を考察してみたい。これら基本的な生活スタイルがいかなる理由で変化するのか、どのような問題が生じるのかを観察することにより、少数民族全体における現代化問題を検討する際、重要な手がかりではないかと考えられる。

(1) 食文化の視点から

ここでまず調査資料写真①・②から見ることにしたい。

写真①の内容は、調査中新疆のどの地区でも見られる庶民の食生活に絶対に欠かせない、昔ながらの食品「ナン」が売られている様子である。ナンの種類はさまざまであるが、昔から庶

民の日常において最も基本的な食品である。ナンが不動の地位を維持できた背景には新疆地区的歴史と自然背景が重要な理由だと考えられる。これまで多分野において、ナンについての研究は多く見られ、その伝承の説も数通り存在するが、新疆のナンの食習慣が千年以上の歴史を重ねていることはほぼ相違ないであろう。

11世紀の『突厥語大辞典』の中に、すでに16種類のナンの名前が載っているようだが、現在は二十数種類があると言われている。ナンの製法は、烤爐で焼くのであるが、昔は個人の家に「烤爐」を持つのが普通であり、場合によって、数軒の家族が一つの烤爐を共用することもあった。現在自分の家でナンを焼くことは少なくなり、一部の地域を除いて、ほとんどが商店（露店を含めて）から買う習慣に変わっている。したがって、最も買い求めやすい食品といえるほど、この種の商売をしている店は、あらゆるところに散在している。ナンは発酵という製作過程を必要とするものもあれば、発酵しないものもある。中国の古文献に「胡餅」と呼ばれる記録が多く存在する。考古学的に見れば、この食品は麦の原産地の西アジアが発祥地であるがため、シルクロードを通じて伝わって来たといわれている。その製法に、水分が少ないため、日持ちがよい、新疆という乾燥地域という自然条件下では、一ヶ月の保存も可能であるという。変質しにくく、携帯便利のため、現在でも遊牧民または都会の住民たちの携帯食品として活躍している。

人間の生活において、最も変化し難いのは食習慣である。民族の食習慣の成立は、その民族の生産方式と直接関係するため、食生活に変化が生じれば、その生活方式にも影響するのである。ナンのほかに维吾尔族の食文化についてたとえば：主に抓饭（焼き飯の一種）、烤包子（焼き肉万）、烤羊肉（焼き羊肉）などの伝統食は、長い歴史を経た今も日常の食生活の必需品とされている。そもそも维吾尔族の食文化は、調理法が簡単で、食品の種類も多くはないのが特徴である。麦（特に小麦）を主食とした食生活が一般的である。よって野菜などの品種も少なく、調理技術も単純化されている。このような食習慣の形成には、当然長年の摸索が重ねられ、この地域の自然条件に適合したスタイルに仕上げられた結果であろう。だが、もう一つ重要な理由は、この地区に住む民族の多くはイスラム教を信仰しているため、宗教による禁食の影響から、ナンのこの地域の食文化における地位が固められ、共通する食習慣を持つようになったと考えられる。そして、この信仰をベースにしたライフスタイルが、この地域の生活の基盤に定着したのである。また新疆地区はシルクロードの通過点である以上、古より常に新たな外部からの刺激を受けざるを得ない。もとより漢民族との接点が多く、伝統習慣も多文化の混合と変化が進めているのが事実である。その点に関連して、次の写真②を取り上げてみたい。

写真②の内容は、新疆自治区の首府ウルムチ市内にある大きいイスラム料理レストランのメ



写真① さまざまな種類のナンの店

ニュー写真である。写真の料理名は「魚香肉絲」となっている。もとは四川料理であり、写真を見る限り、ほとんど四川料理に相違ないと思われるが、しかしここで注目すべき問題点が二つある。

その1、四川料理は漢民族のもので、ウイグル族の伝統料理ではないこと。

その2、この料理に重要な食材である肉の部分は、豚肉ではなく羊肉を使用していること。

以上の2点から、新疆ウイグル族の昔から現在までの生活意識変化の実態が示唆されたように考えられる。単に食習慣に関するだけではなく、多方面における生活習慣上の変化の過程を探る手がかりになると考えられよう。次は、この2枚の写真を対照的に比較する意味を説明したい。

写真①のナンについて、現在でもウイグル族の日常生活に欠かせない伝統的主食であると同時に、写真②のように、漢民族の食事習慣を多く取り入れていることも事実である。特に経済開放政策以後、インフラの設備が整えられ、当然ウルムチのような都会は、物質の流通も盛んになり、ほぼ中国の一般的都市生活スタイルが中心になっているように見える。しかし新疆各地のウイグル族家庭の実生活を観察してみれば、民族の主食ナンと同じように、伝統的生活習慣

が依然として、生活意識、形態も含めて確実に深く根付いていることは少なくないのである。この実態には、前述したように、自然条件が最も影響していることは当然であろう。だが、現代化に対面しながら生活の形を変えるとき、漢民族との交流が長い年月と重なり、強い影響を受けていっているとはいえ、彼ら自分たちの最も重要な伝統としての信仰に対して逆らうことはない。この点に関して、その2に触れた「魚香肉絲」という料理に、最も重要な食材の肉が一般的豚肉から羊肉に変えられたことから、ウイグル族の生活変化の形態が反映されていると考えられる。

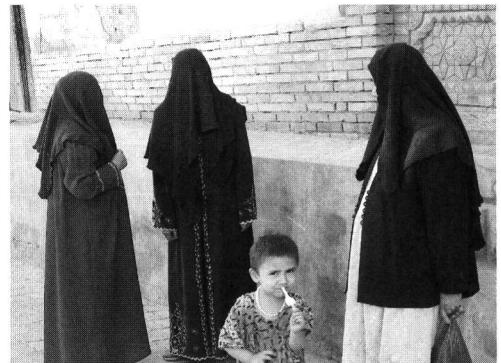
(2) 婚姻家庭機能の変化について

次は生活の基本基盤である婚姻家庭の問題点について、まず調査資料写真③・④を取り上げたい。写真③・④は、ともにシルクロードの要の都市、新疆西部に位置するカシュガル市内の調査内容である。この2枚の写真内容をもとに、ウイグル族今昔の家庭と婚姻問題について、考察してみたい。

写真③に写っているのは、既に現代化された



写真② イスラム化された四川料理



写真③ 老城路地に見るペールの女たち

都市カシュガル市内の一角、「老城（古い町）」という地区の路地を通行する女性たちの姿である。このように現在女性が頭にペールをかぶることは、新疆の各地域によって、多少の差はあるが、それほど多く見られることはない。特に若年世代ではかなり少なくなっている。写真の「老城」でよく見かける理由について、場所が古い下町であるため、伝統的価値観がいまだに強く守られているという点、古いしきたりが女性たちの生活意識に定着されていると考えられる点である。実際に彼女たちにたずねてみると、夫がそう要求しているとの意見が最も多かったのである。

そもそもウイグル族の家庭において、伝統的な婚姻関係は、長い間イスラム宗教信仰の精神と形式を基に成り立っている。夫は妻に対して絶対的権威を持っている。女性は夫権と神権を同等視され、結婚後、夫の命令に従わなければならない。妻は家事労働以外に、家の外での社会的労働を一切禁じられている。家の財産などにかかわることは許されていない。家庭によれば、外出する際、必ずペールをかぶることを妻に厳しくしつけている夫がいる。もし逆らった場合、宗教関係者から処罰を受けることもあるという。このような夫妻関係において、夫側が妻に対して、些細なことでも、気に入らないことがあれば、妻に向かって「タラク」と言えば、妻はもうその家にいられなくなり、離婚が成立することになる。この言葉を3回繰りかえされると、この夫婦関係はもう回復することが出来なくなるという。そして「タラク」を言えるのは、夫側だけで、妻は同様な権限は与えられていない。

一夫多妻制が認められているウイグル族の離婚率がかなり高いことは事実である。その理由は、まず上述のような夫妻地位の不平等であるがゆえに、婚姻関係が散漫で、崩壊しやすいのである。そして伝統的習慣として、早婚が好まれることを背景に、夫妻互いの理解不足が離婚を誘発する起因になる。さらに社会全体が離婚に対して、正当的行為と容認しているため、離婚と再婚の繰り返しが日常的に行われるようになったのである。婚姻制度が宗教の支配下にあるだけに、離婚事例が多く発生する現実から、社会に多くの悪影響をもたらすことは回避できないであろう。中国政府はこの問題を改善するため、1988年に新婚姻法を制定し、新疆ウイグル地区の婚姻制度を政策によって統一的管理を行ったのである。その新制度について特に注目すべき点は、以下の内容である。

1. 男女の婚姻に対する自主権を認めること。これまで好まれた近親結婚の習慣を禁ずる。
2. 早婚を禁止すること。（法的結婚適齢は、男性満20歳、女性満18歳）
3. 宗教的伝統要素を禁止すると同時に、結婚離婚の手続きは全て法律によって定める。

この3点の内、最も難しく且つ大切なのは、宗教に関する部分ではないかと思われる。ウイグル族にとって、宗教のしきたりは生活そのものであるから、完全に宗教的要素を除去するには、新たな知的力が必要であろう。現在では教育の普及により、部分的に宗教的背景が薄れてはいるものの、自由恋愛が認められた以上、新たな離婚理由が発生しているのも事実である。研究資料によれば、理由は以前とは異なるが、都市部の離婚率は減少していないようである。

さて、これまで結婚離婚が頻繁に行われるような状況が続くなか、ウイグル族の社会には、

明らかにさまざまな後遺症が生じている。例えば離婚結婚の回数が重なると共に、その度莫大な費用がかかることによって、ますます貧困に落ちるという悪循環になってしまふ家庭も少なくは無い。更に離婚結婚を繰り返すことで、夫婦の円満度を子供数で計るという観念から、再婚するたびに、生まれてくる子供数の調整が出来なくなるだけではなく、家族の構成も複雑になり、結局家族崩壊へ至る例も少なく無いのである。これに関連して、ウイグル族の家族関係の実態と問題点を考えるために、写真④を取り上げてみたい。

写真④には、あるウイグル家族Aさん一家との交流の席で、その家族中一番高齢のおばあさんが「ウイグル語」で挨拶をしているところである。Aさんのおばあさんは、7人の子供を持ち、現在は長女一家と同居しているが、他の兄弟たちもほとんど近くに住んでおり、遠くでも新疆から離れる事は無い。Aさんの家は、都市に多く見られる高い教育レベルを持つ家庭といえる。

上述したように、ウイグル族社会は、婚姻関係が不安定で、親族の範囲が比較的に狭く、関係も薄い。親族間で唯一の経済的つながりといえば、遺産相続権である。そして親が既婚の子供と同居しないことである。更に既婚の子供たちがそれぞれ独立しているため、両親に対して、絶対的に扶養する義務が無いというのが一般的である。伝統的なウイグル家庭では、父権、夫権が絶対的地位を持ち、家庭中の人間関係を支配し、主導的存在であった。1950年の新「婚姻法」と1954年新「憲法」の颁布によって、上述のような家族間の不平等な地位意識に対して、変化が起きたが、しかし長期的農村経済発展が遅れたため、社会全体が半自給自足の状態にとどまり、家庭における意識改革も停滞し、法律意識と現実生活との格差が依然として大きいようであった。

1979年以後中国政府が改革開放政策を打ち出してから、農村経済体制改革の推進と家庭の生産機能の変化とともに、自給自足の経済状況が打破され、ウイグル社会に変動が起きた、家庭の人間関係まで影響し始めたのである。その明らかな現象といえば、家庭における老人地位の低下であろう。ウイグル伝統の大家族社会において、老人は常に尊敬される存在である。特に大家族の中では、家長であり、絶対的権限を持っている。しかし近年の現代化により、経済体制が変わり、家庭の重要事項を決定する際、さまざまな創意的な思考、知識などが要求され、これまでの単純且つ閉鎖的社會とはかなり相違することで、老人の体力不足だけに限らず、伝統的経験ではもう新しい時代に対応できなくなっている現状から、次第に家庭での地位と権限が低下し始めたのは、生活の変化を伴った時代の流れであろう。従来老人が一家の長である時代から、現在彼らがその地位と権限を次世代に譲り、家庭の重要事項に干渉せずに、家族から扶



写真④ Aさんのおばあさんがウイグル語で挨拶をしている

養されるという実態が増えている。現在でも、家事の多くを女性が担うことが多く見られるが、家庭の重要事項に対する決定権は、夫妻が相談したうえで決定するということが多くなっている。

こうした家庭権力の分散が出来た背景において、子供たちに対する教育の影響があったと考えられよう。Aさんの家庭もこどもたち全員に高等教育を受けさせ、現在それぞれが学校の教師、専門学校の校長、公務員、自営業などの仕事をしている。そしてもう一つ注目すべき点は、Aさんの家では、おばあさん以外の家族全員がウイグル語のほかに、漢民族同様、漢語（中国の共通語）が話せるのである。この点について、以下漢語教育の問題として考えることにしたい。

（3）文明化の実態と教育問題について

ウイグル族社会の文明化と教育問題に関して、調査資料写真⑤・⑥を取り上げ、考えてみたい。

写真⑤は新疆南部に位置する和田市の絨工場で撮ったものである。和田の絨毯は、新疆地区の代表作といわれるほど有名である。1959年和田地区民豊県から、前漢時代の絨毯の残片が出土し、これは中国歴史上最初の絨毯に関する考古文物である。この地区的絨毯工芸は既に2千年の歴史をもっており、現在製品の多くは工場で生産しているが、家庭単位でも製作するほど、この地域の代表的産業である。習慣として、子供たちが幼いころから絨毯を織ることも珍しくないのである。



写真⑤ 絨毯工場の女の子

この工場で、絨毯を織る仕事をしているのは、監督者が男性以外、全員女性である。子連れの母親に半分以上占められてはいるが、中には若い姉妹が一緒に来て仕事をしているのも少なくない。実際に年齢を調べると、六歳から二十歳までぐらいの子がほとんどである。早婚習慣のあるウイグル族なので、仕事に来ている母親たちの年齢は全員若くて、小学校入学前の幼児を連れてきている。工場の中には数個の大きなベッドが置かれていて、幼児たちが工場内で自由に遊びまわっている傍らで、ベッドで寝ている赤ちゃんもいる。年齢に関係なく、毎日一列に並んで一緒に仕事をしている全員、その日織った分の報酬を頭数で割って支払われる。学校がある時はどうするかとたずねると、子供たちは学校が終わってからくると言っていた。仕事をしている子供たちの表情を見ると、絨毯を織る仕事に対する熱意が満ち溢れているようである。ここでの風景は何をあらわしているかを考える前に、まず写真⑥を見たい。写真⑥は、ウルムチ市内を走っている移動の「図書車」である。車体に「西部郷村流動図書車」と「香港青年聯会寄贈」が書かれている。

「西部郷村流動図書車」というのは、2005年から、中国中央共産党青年団、中華海外聯誼会、中華全国青年連合会、海外傑青会中華籌委會などの団体を中心として、国内の中央共産党青年団と連携して作ったボランティア機構より、西部貧困地区青少年の文明化の向上を主旨に、出来るだけ早く知識文化と情報の伝達が出来るようにするため実施した企画である。

この企画における実施の形態は「流動型」「定点型」、「特約型」の3通りがある。辺境地区の山村地帯、城鎮、郷村の祭りの集市などの日を利用して、または学校、市町村の地方団体、企業、福祉団体などへの特約サービスを提供する。サービスの内容は、主に西部貧困地区の青少年に図書、非図書の無料貸し出し、組織的に図書の寄贈を呼びかけ、図書発行企業団体の協議のもと、西部貧困地区の青少年に特価サービスをする。更に流動図書車を通して、各分野における専門家などを学校、市町村の地方団体、企業団体、福祉団体へ公開講座を行い、貧困地区青年たちと選書知識、読書体験交流を行う。地区のニーズに応じて、不定期の展示会を行い、都市の法律、文化、科技、衛生など各方面的学者または技術者、図書車を通じて、農村貧困地区へ直接指導活動を行うことを呼びかける。都市と郷村だけではなく、定期的に香港、マカオ地区及び海外の青少年団体を組織し、図書車を通じて、国内の青少年と交流する。

以上流動図書車の主旨、実施形態とサービス内容を詳細に述べたのは、その目的と実施内容から、現在少数民族地区教育に関する問題点の一側面と考えたからである。この点を踏まえて、まず新疆地区の文明化、教育に関する研究資料を基に、その実態を見ることにしたい。

中国の少数民族辺境地区的教育問題の現状では、文盲率、入学率、輟学率が高く、完学率が低いことで非常に深刻な問題を抱えている。中でも特に注目せねばならないのは、これから社会を支える柱的世代である青壮年の文盲率が高い事実である。青壮年の文盲率が高いという事実の背景には、入学率、輟学率の高いことが関係しているであろう。

研究資料によれば、1990年の第4回人口調査と1995年1%サンプリング調査において、新疆地区少数民族人口の文化レベルは確実に上昇し、文盲率は1990年の22.5%から1995年の13.69%へ下がっており、大学専門学校以上の学生人口も1990年の1.34%から3.49%に増加している。しかし現状では、文盲と半文盲の人口が依然として高い比率を占めているため、基礎教育の基盤が弱い事実は否定できないであろう。小学校以下の文化レベルの人口は、総人口の60.9%にも占められ、労働適齢人口の3分の2が小学校程度の文化レベルしかない、更に15歳以上人口のうち、文盲と半文盲の人口比率が16.36%にも達し、6歳以上の人口では、文盲と半文盲に比率がもっと高く18.44%であった。これらの統計数字から、上述した写真内容にも反映されたと考えられる。



写真⑥ 西部郷村流動図書車

この教育実態と問題が生じる背景を考えるには、ウイグル族の伝統教育観を理解しなければならないであろう。ウイグル族の伝統的家庭教育は、子供の品德倫理、生活常識及び宗教文化が中心とされている。教育法として、コラン経の誦読、または両親からの伝承などが一般的である。1950年代以前は、農村地区に数少ない（イスラム教）経文学校があるだけで、近現代教育はほとんど行われていたため、現在もその伝統的観念が強く家庭教育へ影響している。

農村地区には、両親が文盲と半文盲である文化レベルが低い家庭が多いため、子供の教育について、関心が少ないのが普通である。特に注目すべき点は、農村では女子の輟学が多い現象がある。調査資料によれば、新疆の南地区において、子供の中学進学率が低く、少しだけの文字を覚えれば十分だと考えている親が多い。中学校まで進学させる必要が無いと考えているのである。小学校の時期では家事の手伝いが出来ないため、学校に行かせるが、中学校に入る時期になると、家の重要な労働力であるため、学校には行かせなくなるのが普通である。政府は中学校への進学率を高めようと、学生に対しての補助金の支給など多くの奨励策を提示すると同時に、学校に行かせない家に対しての罰則も作ったのである。写真⑤の和田市も新疆南地区だが、上述の調査実態から見ると、絨毯工場で働いている女の子たちの就学の状況もかなり現実的に、以上のような教育背景をあらわしていると考えられる。

1980年代の開放政策実施後、新疆地区の生活形態の変化が見られ、特に消費生活方面について、1992年の調査資料では、テレビの購入台数が上昇し、最も重要な文化的消費品になったのである。それまでの新疆は閉鎖的社会であったが、テレビを通して、外部からさまざまな情報が入ることにより、多少とも伝統的生活意識に影響をもたらされたであろう。しかし反面、新聞、書籍、雑誌の購読数は依然として少ないようである。その理由について、まず上述した伝統的教育観が強く影響していることがあり、次に交通手段の問題、つまり新聞、雑誌の発送時間がかかることがあげられよう。そして最も重要な原因は、社会全体の文化レベルが低いという現実があると考えられる。写真⑥の図書車は香港の青年団体からの寄贈品で、ウルムチ市内で見かけたが、そもそも農村地区を対象とするものであるが、農村地区の識字率が低い現実に、本を読める人数は、都市部とかなり差があるであろう。農村とその周辺に書籍が少ないので、小学校を卒業した子供たちは、卒業後書籍と触れ合うチャンスがほとんど無い状況が数年も続くと、折角覚えた漢字も忘れてしまい、青壯年文盲と半文盲の予備軍になるのも事実である。写真⑥のような流動図書車の構想と目的もまさにこのような問題背景を踏まえた対策であろう。活動の運営資金と人員援助の面において、中国国内だけではなく、海外各地の華人社会と協力し、強制的政策を取らない柔軟性を持った方式で、少数民族地区の青少年たちが読書の習慣を身につけるよう、先ほど紹介した図書車のさまざまなサービス内容を考慮したのである。

ここで少数民族の「読書」問題を検討すると同時に、当然漢語（中国の共通語）のことを考えなければならない。少数民族とはいえ、中国国内の義務教育を受ける場合、一般に漢語を使う必要がある。図書を読むということは、まず漢語が出来ることを前提として要求されるであろう。現代化が進む中、漢語を話せ、読み書きができるることは、少数民族にとって生活に欠か

せない重要な問題になっているのも事実である。この点に関して、次章の現代化問題において考えたい。

第三章 経済生活の現代化における問題点について

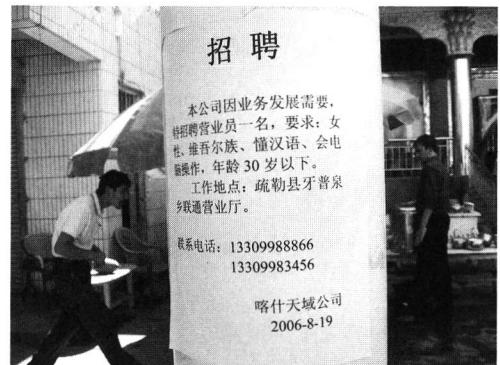
経済と生活の現代化は世界共通の発展方向である。中国の少数民族地域においても政府の改革政策の下で、さまざまな変化が起こり、さまざまな問題を抱えながら、進められているのが現状である。その中で、各少数民族地区に共通する問題もあれば、その民族独自の問題も存在する。ウイグル族の場合も生活形態の現代化により、問題点が多く生じているが、全てを取り上げることは出来ないため、調査資料の写真を取り上げながら、特定の顕著な問題点を考えたい。

（1）生活形態の産業化と漢語（共通語）普及の問題

この問題について、調査資料写真⑦・⑧を見たい。

写真⑦はカシュガル市内の某場所に張られている求人広告である。求人の内容は、「女性営業職で、30歳以下、ウイグル族限定、漢語（共通語）ができる、パソコン操作ができる」のが条件である。ここで提示された応募条件に、注目すべきところは、「ウイグル族に限定」と「漢語ができる」の2点である。勤務地はカシュガル市南部の疏勒県の牙浦泉という町である。大都市での勤務を対象にした求人情報ではないだけに、もっと重要視せねばならない。要するに、このような応募条件は、既に都市部だけに限られた現象ではなく、次第に他の地域にも広がり、一般化されつつあることを示唆しているであろう。

民族の伝統文化を維持しながら現代化を進めるには、実行の方法として、およそ生活の質の向上に重点が置かれることが一般的である。だが日常生活に実用的価値がある部分については受容されやすいが、反面精神生活において、伝統的歴史文化背景が生活意識と密接に関わっている部分では、簡単に変化することは出来ないのが普通である。ウイグル地区の生活形態を観察すれば、衣、食、住などさまざまな分野において、物質的方面は多く現代化されたとはいえ、伝統的社會倫理、婚姻、礼儀習俗などにおいては、依然として厳しい伝統意識が強く制限されているのが現状である。そもそもシルクロードの道のりに位置するウイグル族地区であるため、常に異文化と交互に融合を進めたであろうが、地理環境の閉鎖性と宗教の束縛により、これまで大規模な異文化受容は起こらず、生活様式の変化も乏しかったのである。だが、昔から絶えず周辺地区からの漢民族の移入で、彼らが持ち込んだ文化的影響は、異文化としてかなりウイグル族の生活に解けこんでいるという事実は否定できない。近年では生活のニーズに伴い、更



写真⑦ カシュガル市内の求人広告

に教育政策の働きかけにより、漢民族文化の受容と吸収は、特に仕事上の必要性が注目され、新疆地区の社会に定着しつつあると考えられる。が、この過程において、漢語能力の普及向上が最もハードルの高い問題ではないかと考えられる。

現在新疆では、地域によって漢族とウイグル族の住み分けがはっきりしているところが多く、場所によれば、全く漢語が通じないところも決して少なくはない。その理由は、ウイグル族が自身の民族言語と文字を持っていることがあり、そのうえ第二章で提起した教育事情が重要な背景であると考えられる。たとえ学校教育を受けても、新疆では小学校から漢民族の学校（漢語使用）に通い、その後大学まで進学した若い男女と、一貫してウイグル族の学校を高校まで進んだ人たちとは互いに違和感があると言われている。その理由としては、文化的相違から、価値観が異なり、生活習慣が変わるからである。しかし一方では、中国の国民として生きる以上、中国のほかの地域と同様に、業務上では漢民族との交流は当然必要視されるし、特に公的機関に勤務する場合は漢語力が基本的に必要になるであろう。

1991年、国家民族事務委員会の「少数民族の言語文字能力強化に関する報告書」には、中華人民共和国民族区域自治法に従い、主に少数民族の学生を募集する学校は、条件が整えば少数民族の文字の教科書を使用し、少数民族の言語で授業を行い、適切な学年から漢語課程を増設し、二言語教育を実施し、全国に通用する漢語（共通語）を普及させるべきであると書かれている。政府の立場として、少数民族の言語文字を尊重すると同時に、現実社会融合の必要性も重要視せねばという問題提起をしているように理解できる。

これまでのウイグル族の社会生活様式は自給自足が多くを占めていたが、現代化により、生産が社会化、工業化されつつ、個体の利益を優先するという考え方方が増加している。さらに家庭の収入を増やすため、家庭の余剰労働力は外社会へと働き口を求めるようになり、特に新疆各地の若年層世代では出稼ぎ労働の光景がよく目に付くのである。ウイグル族が家を出て外で働く場合、またはウイグル族の生産形態が産業化されたため、綿花などの農産業に、漢民族の労働力を雇う際、交流に欠かせない条件といえば、「言葉」である。写真⑦の、求人に「ウイグル族で、漢語が出来る」という条件設定は、まさに現在の新疆地域産業社会の現実を如実にあらわしていると考えられよう。この事実と関係する資料として、写真⑧に触れてみたい。

写真⑧には、新疆南部のある都市のホテルが民族色を出すため、アトリスシルク（シルクロードの特産品）を着用させた女の子をホテルの玄関に立たせ、お客様を迎えるのである。この女の子たちの話によれば、二人は農村からの住み込み出稼ぎである。漢語があまりできないことと都市社会になれないため、単純な仕事しかできず、高い給料を貰うのは無理であるという。



写真⑧ ホテルの女の子

新疆地域の現代化が進行する中、さまざまな産業が興り、特に少数民族地区に共通して興隆しているのは観光産業である。観光客の大半に占める国内及び海外の中国系の人々を対象に、漢語に対するニーズが高まり、少数民族の漢語能力の向上が一層注目されるであろう。さらに、今後あらゆる分野の産業、市場を問わず、新しい技術と情報を得るための手段として、漢語能力の需要がますます増加することは明らかである。この風潮と流れは、新疆を含めたほかの地域においても、民族学校の不振につながる背景になりかねないとは言え、第二章で論じたウイグル族社会の文明化と教育レベルアップの問題に対して、その壁である伝統意識を突破し、影響をもたらす原動力になりうるのではないかと考えられる。

（2）現代化と環境問題

現代化が進行する過程において、避けて通れないのが環境問題であろう。特に新疆地区は沙漠面積が広く、気候と人為的な原因から、砂漠化がますます深刻化している。中国国内沙漠の総面積の半分以上の約40.1万平方kmを新疆が占めているのである。新疆オアシスの沙漠化は、タクラマカン沙漠周辺の南側と西南側で、特にウイグル族が多く住む和田地区が最も嚴重だといわれている。現状のまま放置すれば、この地区の町が砂の移動により消滅する可能性もあるという。環境保護には政府の政策が当然重要だが、住民たちの問題意識も必要である。住民自身に環境問題を意識させるためには、教育レベルの向上、閉鎖的社会の開放、外部との協力、特に資金と投資の面において不可欠であろう。これらの問題と関連して、次の調査資料写真⑨・⑩を見たい。

写真⑨は天山南側の輪台県からタクラマカン砂漠を縦断し、民豊県までの沙漠高速道路にそつて、砂漠化を制止する対策として、地下水を汲み上げて砂漠緑化をする施設である。この全長約400キロの道路は2005年に完成している。写真の「水井房」は沙漠道路全線の片側で4km毎に設置され、全部で108箇所がある。水井房の中は、地下水をくみ上げる設備が設置されている。地下水をくみ上げ、道路両側にホースを配置し散水することによって、草を生えさせる仕組みである。この設備の実施より、新疆ウイグル族地区の環境に関わる多くの問題点が伺え知れよう。

さて、現在この砂漠道路は、観光と生活の道路になったが、そもそも資源開発をする目的で、石油会社が石油と天然ガスなどを運ぶために造ったものである。砂漠の中では道路を造っても砂嵐で道路が消えてしまう恐れがあるので、両側を緑化する対策を考えたのだ。当然莫大な資金源がなければできないことであろう。そして資金の問題だけではない、設備と同時に人員管理も欠かせないである。上述の水房には、一箇所につき、年間8万元で、8ヶ月間住み込みで管理することになっているが、辺境地域では高い給与を支払うことで管理人員を集めている。砂



写真⑨ タ克拉マカン沙漠道路側の水井房

漠での孤立した生活は精神的に耐え難いため、必ず夫婦または家族であることが労働条件とされている。

そもそも新疆地区には、1930年代以前には正式な道路はなかったが、資料によれば1949年に8400km道路まで増設できたが、実際に通行しているのは3361kmに過ぎない状況で、平均1平方kmに1kmの道路しか無い計算になる。世界中でもっとも道路密度の低い地区といわれるゆえんである。自然条件の厳しさから、外部世界と隔離されている状態は決して珍しくないのである。1950年代以後は道路と鉄道の建設が進み、特に1979年南疆鉄道の完成により、交通と生活に便利さを与えると同時に、文明化と経済開発に多大な影響を与えたのである。2007年現在は、南疆鉄道の幹線を強化し、輸送量を緩和させるため、新たに鉄道建設のプロジェクトが実行されている。政府からは、辺境地域の開発、文明化といえば、欠かせないのがインフラの整備である。中でも道路建設がもっとも重要であることは、シルクロードの発達により、経済、文化の交流を深めさせた歴史的実績が確固たる手本であろう。実際砂漠周辺の各地で、文明化するために借金して道を造る重要さを訴えるスローガンが良く目に付くのである。道路ができれば、人間も物質も文化の交流が盛んになるであろう。現在シルクロードが石油ロードに変わったとは言え、写真⑩道路を利用して、家畜の餌を運ぶ、または家族がロバで引く車で移動する光景をよく目にるように、住民たちの重要な生活道路になっている点も重要視せねばならない。一企業の利益だけのための道路建設ではなく、資金、技術と人力の提供により、環境が悪化する矛盾と難題を克服しながら地区の現代化に貢献することは、資源が豊富な新疆地区ならではの課題と特徴ではないかと考えられよう。



写真⑩ 国道で家畜餌を運ぶ

終わりに

これまで新疆ウイグル族を中心に、マクロ的に現在生活の具体例を取り上げながら、問題点を考察したのである。古より厳しい自然条件から作り上げられた閉鎖的社会が、長期にわたって持続し続けた現実から、彼ら独特な生活形態と意識を育んだこと、それを疑う余地はないであろう。経済の現代化を含めて、中国政府の西部地区における大規模な開発は、これからますます進展することは明確である。今後ウイグル族社会において、経済の現代化から、大きく生活形態に変化をもたらすことは相違ないであろうが、しかし生活意識における精神的因素は、物質的形の受容と異なり、簡単には転変できない。その最も根本的理由は、宗教信仰の伝統が深長に根をおろしているからだと考えられる。

長年にわたって、イスラム教の習慣がウイグル族生活そのものであり、思考も価値観も宗教

が基盤で成立している。異文化または異なる価値観に対する受容が困難な状況は、決して少くはないのが現実である。文明化するためには、多方面において生活意識を転変させる必要がある。上述に触れた家庭、婚姻、教育など現実問題を改善するほかに、貧困層を減少させるためには、環境の全体的改善策として、経済の現代化は欠かせないのである。そして個体レベルで考えると、例えば個人の環境問題に対する意識を高めるなど、生活の中における多方面の意識の転変が必要のため、知識の伝達ができる教育を受けさせることができることが前提であろう。しかし今回の広範囲な現地調査も含めて、ウイグル族の社会を具体的に検視すると、いまだに宗教的因素があらゆる問題のハードルになっていることも露呈している。この問題は教育水準の向上を通してある程度の解決ができると考えられる。この点に関して中国政府もさまざまな積極策を取り入れ、努力していることは事実である。しかし、困難の多い現実の状況を考えれば、まだ時間が必要視されよう。

今後、政府または企業の協力により、特に上述調査資料に触れたように、交通を含めたインフラが整備されれば、物流が興隆すると同時に、異文化との接触も必然的な増加をみるであろう。さらに観光産業の発展のために、外部の人間に対する受容も必要とされ、交際の往来が増加することで、自然にウイグル族生活の形態と精神的意識に変化をもたらし、文明化の進展に多大な影響を及ぼすことであろう。

主な参考資料

- 维吾尔族生活方式 曹红著 中央民族大学出版 1999
中国の西部開発と持続可能な発展 西川潤 潘季 蔡艶芝 編著 同友館 2006
中国少数民族教育と言語政策 岡本雅享著 社會評論社 1999
中国少数民族教育政策文献集 金龍哲編訳 大学教育出版 1998
中国的民族関係和民族発展 余振 達哇才仁主編 民族出版社 2003
20世纪中国少数民族与教育 滕星 王軍 主編 民族出版社 2002
アジアの環境問題 環境経済・政策学会編 東洋経済新報社 1999

(本論は2006年筑紫女学園大学個人研究助成金の成果である)

(せき きりん：アジア文化学科 教授)